

安藤優一郎著「徳川慶喜と渋沢栄一―最後の将軍に仕えた最後の幕臣―」日本経済新聞出版社  
2012年5月23日刊を読む

## はじめに―旧臣の目から見れば

明治元年(1868)12月23日午後10時。

フランスから帰国したばかりの渋沢篤太夫とくだゆうは静岡城下の宝台院ほうだいいんの一室で、主君徳川慶喜よしのぶとの拝謁はいえつの時を待っていた。渋沢篤太夫とは、後の渋沢栄一。日本の近代化を語る上では欠かせない人物だが、実は最後の将軍徳川慶喜の家臣でもあった。栄一には幕臣の時代があった。

前年の慶応3年(1867)正月、栄一は日本を発ってフランスへと向かった。慶喜の弟昭武あきたけのフランス留学に伴い、留学中の会計係として渡仏したのだ。留学期間は5年から7年の予定だったが、フランスにいる間に、日本では大変革が勃発する。明治維新である。

主君慶喜は大政奉還により、自ら将軍の座を退いた。だが、鳥羽・伏見の戦いで薩摩・長州藩に敗れ、朝敵となってしまう。江戸城を明け渡した後、慶喜は水戸そして静岡で、30年もの間、謹慎生活を余儀なくされる。

本国の激変を受け、栄一は昭武と共に急ぎ帰国する。帰国後、慶喜のいる静岡に向かい、この日、約2年ぶりに拝謁することになったのだ。

栄一は後年、その時のことを次のように語っている。時に栄一は29歳。慶喜は3歳年上の32歳。二人が再会を果たした部屋は粗末な六畳ほどの部屋。とても、かつての将軍が拝謁を受けるような空間ではなかった。

公ゆうきよの幽居宝台院に出たのはあたかも夕暮の事で、行燈あんどんの前に端坐たんざして公の御出座を待って居る間に、侘住居わびずまいの御様子を見廻して、昨年御別れ申した時とは実に雲泥の相違そぞと、坐ろむせに暗涙かぬに咽び居るところへ、公は座に入らせられたので、一通りの御機嫌を伺い畢ると、覚えしゆくぎず予ての宿疑おぼしめしが口へ出て、政権返上の事、またその後の御処置は如何なる思召なさけであらせられたか、如何にしてこの如き御情なき御境遇には御成り遊ばされたかと、御尋ね申したところ

わずか1年前には将軍として天下に号令していた人物が今は…。その雲泥の差に、栄一は大きな衝撃を受ける。あたかも浦島太郎のような心境だったのではないか。ただ涙がとめどなく流れるばかりだった。

このような情けない境遇になってしまった慶喜の姿を見た栄一は感情を抑えきれず、なぜ大政を奉還したのか、鳥羽・伏見の戦いに敗退したからとあって、その後、官軍に抵抗きやうじゆんせず恭順きやうじゆんの道を選んだのはいかなるお考えの上でのことなのか、と疑問をぶつけないではいられなかった。

しかし、慶喜(「公」)は栄一の言葉をさえぎって、重い口を開いた。

公たいぜんは泰然として、今更左様いまさらの繰言くりごとは甲斐かいなき事である、それよりは民部みんぶが海外における様子はどうであったかと、話頭わとうを外に転ぜられたので、私も心附いて、公子の御身上の事どもを審つまびらかに言上した。久しぶりで公の御無事を拝したのつひは限りなく嬉しかったが、胸裏に貯えた宿疑は竟に解ける機会がなかった。

今さら過ぎたことを言っても仕方がないではないか。それよりも昭武(「民部」)のフランスでの

様子を聞かせてほしいと促した。慶喜に詰問するような言い方をしたことに気づいた栄一は、それ以上はもう何も言えなかった。

こうして、慶喜との再会の時は終わった。だが、慶喜の一連の行動に対する疑問は解けないままだった。

その後、栄一は明治政府からの強い要請を受けて大蔵官僚となるも、やがて野<sup>や</sup>に下<sup>くだ</sup>る。数多くの会社や銀行を設立するが、そんな近代日本の実業界の父としての顔は良く知られているだろう。しかし、栄一の前半生と言うべき幕臣時代の姿は一般にはほとんど知られていない。

一方、慶喜は大政奉還に象徴されるように、まぎれもなく幕末の政治史を主導する一人だったが、明治維新を境に、敗者として歴史の表舞台から退場してしまう。それと入れ替わるように、栄一が明治という新しい時代を経済面で牽引していく。

だが、栄一にはずっと心に引っ掛かっていたことがあった。慶喜の一連の行動に対する疑問である。さらには、明治政府の慶喜に対する処遇には憤懣<sup>ふんまん</sup>やる方なかった。

慶喜は謹慎を解かれた後も、明治 30 年(1897)まで静岡に住んでいる。政府に遠慮し、自ら進んで謹慎を続けたのだ。公爵に叙<sup>じょしやく</sup>爵されるという形で名実ともに名誉が回復されたのは明治 35 年(1902)のことである。

そのため、かくも長く慶喜を陽の当たらない立場に置きつづけた明治政府の仕打ちに、栄一は激しく憤慨する。

旧臣の目から見れば、朝廷の公に対する御仕向<sup>しむき</sup>は余りに御情<sup>なさけ</sup>ない、畢竟<sup>ひつきよう</sup>これは要路に居る人々が冷酷の致す所であると思うについて、私は特にその頃の政界に時めく人々の挙動にはなはだしき厭悪<sup>えんお</sup>の念を起し、公の逼塞<sup>ひつそく</sup>の御様子が見るに忍びぬ様に思われて、慷慨悲憤<sup>こうがいひぶん</sup>に堪えなかった。(以上、渋沢栄一「徳川慶喜公伝 1」平凡社東洋文庫、1967 年)

そして、栄一はあることを決意する。慶喜の伝記を編纂しようと考えたのだ。慶喜に成り代わって、その名誉を回復しようとしたのである。自分に課せられた「天の使命」とまで位置付け、第一線を退いた後の人生を『徳川慶喜公伝』の編纂に捧げる。そんな栄一を慶喜は深く信頼した。

徳川慶喜と渋沢栄一。

本書は、一見何のつながりもないように見える二人の人生を追いかけることで、明治維新後の徳川家の姿を描き出す。

P9 ~ 12

#### [コメント]

将軍と幕臣の自らの使命達成と相互の信頼関係が、日本の歴史の形成に大きく影響したことがよくわかる。もし、このお二人がこのような行動をしなかったら日本は大混乱に陥り、また、日本の資本主義の発展も成し遂げられなかったに違いない。もう一度学びたい、徳川慶喜将軍と渋沢栄一先生。

— 2012 年 9 月 9 日 林 明夫 記 —